

# TRANS

『『翻訳』の諸相』研究会 Newsletter No.18

2006/1/19

## お知らせ

▼第二研究班の活動は本年度をもって終了します。研究会、国際シンポジウム、国際フォーラムに参加していただいたメンバーの方々、ゲスト・スピーカーの皆様、そして聴衆の方々、またニューズレターに寄稿していただいた方々、読者の方々に厚く御礼を申し上げます。昨年まで研究班のリーダーを務めて下さった吉田城先生が望まれていたように、この研究班の活動が若い研究者にとって刺激となり、より視野の広い研究へと発展していくことを願ってやみません。

(永盛記)

◆第一研究班が、以下の要領で、第 20 回研究会を開きます。ご参加ください。

日 時： 2006 年 3 月 25 日（土） 午後 1 時より

場 所： 京大会館 213 号室

報 告： 松本ドロタ（京都ノートルダム女子学院大学）「ナボコフ訳・注『オネーギン』第 8 歌第 36 連から Onegin's Journey[11]まで」

## シェイクスピアとフランス・ロマン主義

永盛 克也

前稿「シェイクスピアとヴォルテール」(*TRANS* No.7, 2004/3/24) では、フランスのシェイクスピア受容史においてヴォルテールが果たした先駆的役割を検証することを試みた。その際、この才人の見事な先見性や豊かな感受性には敬意を払いながらも、余りにも深く彼を規定していた古典主義的美学の限界とでも言うべきものを指摘しておいた。ヴォルテールには想像すらできなかつたであろうが、彼の死後(1778年)半世紀も経過しないうちに、シェイクスピアの名はフランス演劇界に計り知れない影響を及ぼすことになるのである。

この間、フランス革命とそれに続く混乱が演劇を取り巻く事情を大きく変えていた。1791年の法令によりコメディ＝フランセーズ、オペラ、イタリア人劇団に与えられていた特権と事前検閲が廃止され、劇場が自由化された。また、初めて「著作権」が認められた一方で、死後5年以上経過した劇作家の作品は公共のものとされ自由な上演が可能になった。結果として演劇界は非常な活況を呈することになり、上演回数・出版点数は飛躍的に増大し、パリの劇場数も14(1791年)から35(1792年)へと増加したが、1797年には約20へと淘汰され、1807年にはナポレオンの意向で大衆劇場が閉鎖され、パリの劇場数は8になった。

この時期、古典劇はどのような状況に置かれていたのだろうか。貴族社会の崩壊とともに「芝居通」の数は減少したが、消滅したわけではなかった。新興階層に属する観客は趣味教養の程度が低く、批評家を頂点とする芝居通の影響力はむしろ強まったのである。さらに、ナポレオン治下で大衆劇場が閉鎖され、1812年には財政・芸術両面からコメディ＝フランセーズの運営に国が介入することになり、正式座員の特権が強められるなど、むしろ擬古典主義擁護策がとられるようになった。王政復古(1815年)後の政権もこの制度をほぼ温存したため、演劇界における旧体制の象徴とも言えるコメディ＝フランセーズは古典劇の牙城として存続していたのである。ここで、その非凡な才能によって古典悲劇を支えた俳優タルマ François-Joseph Talma (1763-1826) の存在を忘れてはなるまい。彼は高貴で熱情にあふれた演技によりコルネイユやヴォルテールなどの古典劇の人気を復活させ、シェイクスピア四大悲劇の翻案にも取り組んだ。四半世紀にわたって舞台に君臨し、悲劇好きのナポレオンの寵愛も受けたのだが、その死によって観客の悲劇離れは決定的なものとなった。結果的に、前世紀からの課題であった悲劇ジャンルの革新そのものは実現しないまま、新しい観客層の趣味とのずれが拡大したことが19世紀におけるメロドラマ *mélodrame* の隆盛をもたらしたとすることができるだろう。

フランス演劇が置かれていたこのような状況の中で、英・独・伊などロマン派の先進国から新しい演劇や演劇論が輸入されたことは若い知識階級への大いなる刺激となった。スタール夫人 *Madame de Staël* (1766-1817) がシュレーゲルやシラーをフランスに紹介した事実はよく知られているが、シェイクスピアに関して言えば、1821年にギゾー *François Guizot* (1787-1874、歴史家・政治家、七月王政期に外相・首相を歴任) が出版した13巻の全集が重要である。これはル・トゥルヌール *Le Tourneur* 版 (1776-83年出版) の改訳という体裁をとってはいるが、翻訳は徹底的に見直されてより正確になり、さらに作家の伝記と作品解説が付されたもので、新しい世代の読者に決定的な影響を与えたとされる。

翌1822年、パリ巡業中の英国劇団によるシェイクスピア劇上演が反英的な態度の観客によって混乱に陥るといふ事件が起こった。この時、スタンダール *Stendhal* (1783-1842) は直ちに「ラシーヌとシェイクスピア」という鮮烈なタイトルの雑誌記事を発表する(翌1823年に加筆されて出版、さらに1825年に増補)。スタンダールにとってはイタリアから持ち帰った新しい演劇思想をフランスに広める好機であった。「現代の劇は古典主義的規則から解放され、韻文ではなく散文で書かれ、自国の歴史を題材とするべきであって、そのモデルは無論シェイクスピアに求められる」というのがその主張だが、何よりも「ロマン主義とはまず同時代の芸術である」と規定した点が画期的だった。この『ラシーヌとシェイクスピア』は文学史においてフランス・ロマン主義の最初のマニフェストとして紹介されることが多い。その有名なタイトルゆえに誤解が生じないように記しておくが、スタンダールはここでラシーヌのみを標的にしているわけではない。「ラシーヌもシェイクスピアも彼らの時代のロマン派だった。いつの時代も古くさい束縛から逃れ、自分の美の定式を作り出さなければならない」と述べるスタンダールが批判の対象としているのはあくまでも因襲に縛られた古典主義なのである。

同じく文学史上に名高いロマン派演劇のマニフェスト『クロムウェル序文』をユゴー *Victor Hugo* (1802-1885) が世に問うた1827年、英国劇団が再度パリに巡業し、シェイクスピア劇を原語で上演して大成功を収める。ギゾー訳などにより観客の知識と理解が深まり、新しい演劇への欲求が高まったこと、英国俳優の斬新な演技が観客を驚かせたことなどがこの成功の背景にあったと思われる。この時の上演が若いロマン派世代に与えたインパクトは計り知れないものであった—デュマ *Alexandre Dumas* (1802-1870) は啓示を受け、劇作家を志すことになる。ところで、『クロムウェル序文』においてシェイクスピアを自らの理論の体現者と位置付けたユゴーは、後年、亡命中に何をするつもりかと息子 *François-Victor Hugo* (1828-1873) に問われて「大海原を眺めるつもりだ」と答えた。お前は何をするつもりだと問い返された息子は「シェイクスピアを訳すつもりだ」と答えたという。息子は12年をかけて全集(1859-65年出版)を完成させた—これは20世紀においても読まれ続けた版である。父親はこの全集に長大な解説文を寄せて、改めてシェイクスピアへの賛嘆の念を表した。「大海原のような人間がこの世にはいる。この無限にして、測り知れないもの、それらがすべて一つの精神に宿ることがある。その精神を天才と呼ぶのである。」

## 研究会の報告（発表レジュメ）

「テキスト輪読：Aleksandr Pushkin. Eugene Onegin. Translated from the Russian, with a Commentary, by Vladimir Nabokov. Princeton University Press, 1975.」 範囲：第8歌第1連から第14連まで（pp. 129–173）

最終章の第8章は、ミューズが初めて詩人を訪れたリツェイ時代の思い出から始まる。註では、アレクサンドルI世が設立したリツェイの栄えある第一期生であるプーシキンが、母校と同期生を終生大切にしていたことが語られる。ナボコフ自身がそのような強い同窓意識を持つことがまったくなかったこととは対照的である。リツェイの教育制度を紹介する中で、ナボコフは同校で体罰がおこなわれなかったことを当時の西欧の教育制度に比べて進歩的であると評価する。『記憶よ、語れ』で子供時代のナボコフが、自分は一度も体験したことのなかった体罰の場면을叔父にもらったアメリカの絵本に見つけ、「エキゾチックな拷問」のように感じたことを思い出させる。

リツェイについての註でひととき興味をそそるのが、フランス革命の指導者ジャン＝ポール・マラーの弟の一人がプーシキンを教えていたという記述である。暗殺されたマラーは、『ロリータ』『青白い炎』『アード』で言及されており、ナボコフ世界の「常連格」の一人である。リツェイで教鞭をとり、その地に骨を埋めた隻眼のマラーがダヴィドとアンリのどちらであったかについて「調べる価値あり」で終わらせていることは、徹底して調べ上げるナボコフには珍しい。

リツェイ卒業後の生活を描いた数連では、ミューズが前面に登場する。詩人はミューズを伴って首都での放蕩にあけくれた後、ロシア各地を放浪する。コーカサス、クリミア、モルダヴィアといった土地への旅は、断章として出版された『オネーギンの旅』のダイジェスト版といえる。詩人はミューズによって自然の中に導かれ、ロマン主義的な体験と感動を与えられる。詩人自身が経験したはずの遊牧民との官能的な交流は、放縦なミューズの体験として描かれる。やがて突然に旅が中断され、ミューズは地方の令嬢の姿で詩人の庭に現れる。ここからタチアナの分身とも見えるミューズが、詩人に付き添われて社交界にデビューし、今では社交界の花形となったタチアナに、さらには帰還したオネーギンに読者を引き合わせる役割を果たす。時にミューズと同一化しながら詩人がオネーギンになり代わって「オネーギンの旅」をしたが、社交界の場面ではミューズとタチアナの姿が重なり、また離れる。

オネーギンの旅が、しばしばそう考えられているように国外へのものであったのか、『オネーギンの旅』のように国内に限られていたのかという問題について検討がなされ、ナボコフは後者を採る。

プーシキンのフランス語能力については、これまで幾度かナボコフは厳しい批評をして

きた。ここではプーシキンが自分の署名に「フランス人」と共に書き添えた「猿と虎の混血」という表現に着目し、プーシキンとフランス語の距離を広げようとしているかに見える。「フランス人」とはリツェイ時代のプーシキンにつけられた綽名であり、一般には彼のフランス文学への傾倒ぶりを示すものと考えられている。ナボコフは「猿と虎の混血」の表現が当時フランスおよびフランス国民を表すものであったことをいくつかの実例から述べ、「フランス人」の綽名は、フランス語や文学とのつながりを示すよりも時として激しい気性を表したプーシキンの性格に由来すると説く。

プーシキンと関わりのあった詩人達、デルジャービン、カラムジン、ジュコフスキイについてのナボコフの評価も興味深い部分である。

当時くりひろげられていたロシア語近代化についての論争もとりあげられる。ナボコフの縁続きにあたるシシコフ提督の名前が原稿から救い出される一方、当時の文部大臣であり、古文体擁護派の雄であった彼の業績に対する評価は高くない。新文体派のリーダーであるカラムジンのロシア語改革における功績をナボコフは評価している。しかし、ロシア語変革の時代をリードした功は認めても、党派を率いての運動であったことは当然ナボコフの気に入らない。「いつの時代においてもグループがすぐれたものを生み出したことはない。」カラムジンが主催し、プーシキンも参加していたアルザマス会については、実際以上に革命的なものとして賞賛したソビエト時代の批評を揶揄するとともに、その会の重要性も世評ほどのものではないとする。

ナボコフの小説との関連で興味深いのは、ビュルゲルの「レノーレ」に関する部分であろう。『ロリータ』や『青白い炎』における「レノーレ」の重要性については、プリシラ・マイヤーが *Find What the Sailor Has Hidden* (1988) で論じている。プーシキンがタチアナをなぜ「レノーレ」の死神におびえる乙女と結びつけたのかという謎について、ナボコフは「プーシキンが実際には体験しなかった記憶の旅路をたどる途上で見たデカブリストの処刑場面」がそこに隠されているのではないかという、入り組んだナボコフ的な解を与えている。『ロリータ』の「レノーレ」にも、さらにもう一段屈折した意図があるのかもしれないと思わせる解釈である。

(中田晶子)

## 活動状況

◆第一研究班が、以下の要領で、第18回研究会を開きました。

日 時： 2005年11月19日（土） 午後1時より

場 所： 京大会館 216号室

報 告： 中田晶子（南山短期大学）「ナボコフ訳・注『オネーギン』第8歌第1連から第14連まで」

参加者： 中田晶子、松本ドロタ、三浦笙子、皆尾麻弥、若島 正（以上5名）

この研究会の発表要旨を、エッセイの後に掲載しています。

### 後記：

新年おめでとうございます。本年もどうぞよろしくお願いいたします。この「『翻訳』の諸相」ニューズレターは、仏文科と英文科が溶け合うという貴重な場でありましたので、永盛先生からの仏文研究班終了のお知らせは非常に残念です。英文の研究者にとりましても、仏文班の皆さんの報告、エッセイは大変勉強になり、興味深いものであったと思います。この場をお借りして、仏文研究班の皆さんに（そして、きっとどこかで微笑みを浮かべながらこれをお読みくださっているであろう吉田城先生に）御礼申し上げます。（皆尾記）

研究会事務局

〒606-8501

京都市左京区吉田本町京都大学大学院文学研究科

英米文学研究室（担当：皆尾）

tel./fax: 075-753-2828

e-mail: trans-hmn@bun.kyoto-u.ac.jp

web page: <http://www.hmn.kyoto-u.ac.jp/trans/>

